



## 第7回公開シンポジウム 「地域と環境の持続可能性—酒都西条—」

主催：西条・山と水の環境機構  
広島大学 SATO インキュベーション研究拠点  
共催：広島大学総合科学部、陸域環境研究会  
後援：東広島市

### 開催趣旨；

2030年までに達成すべき持続可能な開発目標（SDGs）は、水資源や里山・里海の保全など自然環境に関わる目標から、まちづくりやパートナーシップなど人間活動に関わる目標まで17項目からなります。東広島市では、古くから酒造りが盛んで良好な地下水と自然環境を利用してきました。その営みの歴史は、貴重な景観として西条に残されています。その酒造協会を中心に設立された西条・山と水の環境機構は、これまで地域の自然環境保全に取り組んできており、今年で20周年を迎えました。これは、まさに地域のSDGsに貢献する有益な活動の一つです。また、広島大学では2018年よりFE（フューチャース）・SDGsネットワーク拠点を中心に、東広島市では「SDGs未来都市」に2020年に認定され、それぞれSDGsに取り組んでいます。

今回は、東広島市の中心地域であり都市化の進む西条に焦点を当て、今年で20周年を迎えた「西条・山と水の環境機構」の活動を振り返りつつ、地域と環境の持続可能性について議論を深めたいと思います。特に、行政、地域（住民、企業など）および大学による役割とその相乗効果について、地域外からの視点（例えば観光客や消費者など）も交えて展望したいと考えています。

日時 2021年7月31日（土） 14時～17時（13時半開場）

場所 広島大学総合科学部 K305（無料）、Zoom配信・YouTube公開予定

\* コロナ禍のため、入場およびZoom参加も事前受付のみ。

開会挨拶等 14時00分～ \*以下敬称略

西条・山と水の環境機構理事長 前垣壽男

東広島市 市長 高垣広徳

SATO インキュベーション研究拠点 小野寺真一

講演 14時30分～16時30分

中越信和（西条・山と水の環境機構運営委員長）西条・山と水の環境機構における活動—  
20年間の歩みと将来に向けて—

金子慎治（広島大学 SDGs 拠点長・副学長）広島大学のSDGsへの取り組みと地域貢献

山本洋子（ジャーナリスト）「新日本酒紀行」から見た日本酒とその地域の未来

小野寺真一（広島大学 SATO 拠点）西条の地下水資源は持続可能か？—農業との相乗効果、都市化の影響—

総合討論 16時30分～17時00分

コメント

栗栖真一（東広島市 政策推進監）「市のSDGsの取り組みについて」

小倉亜紗美（呉高専）「地域活動と市民の役割」

コーディネーター・事前受付先

小野寺真一 広島大学大学院先進理工系科学研究科

082-424-6496 [sonodera@hiroshima-u.ac.jp](mailto:sonodera@hiroshima-u.ac.jp)

## シンポジウム「地域と環境の持続可能性—酒都西条—」 登壇者紹介

### 開会挨拶

東広島市市長  
高垣広徳



西条・山と水の  
環境機構理事長  
前垣壽男



### 講演者

**中越信和** 西条・山と水の環境機構運営委員長、広島大学名誉教授  
講演「西条・山と水の環境機構における活動—20年間の歩みと将来に向けて」：  
2001年設立の西条・山と水の環境機構が行ってきた20年間の環境保全活動を総括する。2010年までの10年間の実績はすでに報告しているので、主にその後の2020年までの10年間の活動を紹介します。なお、里山整備や地下水の保全には継続性が必要なので、環境改善の成果は2001年から蓄積された20年間分である。個人的には発足当時、専門の生態学から広島大学が掲げていた目標の一つ「地域への貢献」ができ、今のSDGsへの展開に寄与でき幸いである。



**金子慎治** 広島大学 国際室・理事、SDGs 拠点長、副学長

講演「広島大学のSDGsへの取り組みと地域貢献」：  
広島大学のSDGsに関わる精力的な取り組みについて概説するとともに、東広島市との連携についても紹介したい。今回のテーマである、具体的な地域の持続可能性に対する大学の役割について、議論する機会となれば幸いである。



**山本洋子** 日本酒と食のジャーナリスト 境港 FISH 大使、地域力創造アドバイザー (株)オレンジページでムック本の雑誌編集長を経て独立。週刊ダイヤモンドで「新日本酒紀行 地域を醸すもの」を連載中。モットーは「1日1合純米酒！」

講演「新日本酒紀行」からみた日本酒とその地域の未来」：  
米の消費量は1962年がピークで1人当たり年間118.3kgを消費したが、2005年には半分近くが減少した。米の余剰分を減らすために田んぼは生産調整（減反）され、その面積は約100万ha。食べて余るのなら、酒用の米を栽培すれば理にかなう。特に酒米は原生種に近い品種が多く、農薬や化学肥料に頼らない方が良い米ができ、自然の生態系が蘇る田んぼが増える。100万haとは国民20歳以上が1日1合の純米酒を飲むのに必要な面積だ。田んぼから始まる地域の未来を発酵で考える。



**小野寺真一** 広島大学 大学院先進理工系科学研究科 教授、SATO インキュベーション研究拠点実施中、日本地下水学会理事など、「瀬戸内海流域の水環境：里水」（編著）など

講演「西条の地下水資源は持続可能か？—農業との相乗効果、都市化の影響—」：  
広島県東広島市西条地区は、古くから旧山陽道沿いに酒蔵が立地し、地下水を利用してきた。しかし、近年の都市化にともなう地下水涵養量の減少、地下水利用量の増加、さらには気候変動にともなう水循環の変化は、地下水資源の持続可能性に影響を落とすつつある。これらの現状の理解とともに将来への影響について整理したい。



### コメンテーター

**栗栖 真一** 東広島市 総務部 政策推進監、市役所に入庁後、国際交流、政策調整、観光、保育等を担当、農水産振興係長、人事係長、職員課長を経て、現職



**小倉亜紗美** 呉工業高等専門学校 人文社会系分野 講師、広島大学平和センター客員研究員、広島循環型社会推進機構 理事、エコネットひがしひろしま 顧問、広島湾さとうみネットワーク 企画運営委員など

